

長谷堂貝塚1955年度調査出土の動物遺体

櫻庭陸央・植月 学・中門亮太・高橋龍三郎

1. はじめに

本稿では、早稲田大学の故・西村正衛教授が主導して1955年に実施された、岩手県大船渡市長谷堂貝塚発掘調査出土の動物遺体について報告する。本調査では縄文時代中期(大木9式期主体)のA地点貝塚および晩期(大洞A式期主体)のC地点貝塚が対象であった(西村1959)。よって、本資料群はA地点およびC地点出土の中期および晩期に属する資料が含まれる。なお、両地点の位置、およびC地点貝塚の調査概要は早稲田大学文学部考古学研究室(1999)、出土土器資料については早稲田大学文学部考古学研究室(2000)にて報告されている。

上記文献をもとに本資料群のラベルを確認し、帰属を検討したところ、ラベルには北あるいは南の記載、グリッド、層位、資料番号?が残されていたものの、どちらの地点の調査による資料か不明な資料が多かった。北と南については早稲田大学文学部考古学研究室(1999)の図2より、北が晩期のA地点、南が中期のC地点と推定されたが、そもそも北と南が記載されている資料が少なかった。グリッドおよび層位が判明している資料も存在したが、中期のA地点の調査概要が不明であるため、これらの情報から地点を推定することも困難であった。したがって、本稿で報告する資料の帰属時期は、縄文時代中期(大木9式期主体)あるいは晩期(大洞A式期主体)となる。

2. 三陸海岸域の縄文時代貝塚出土の動物遺体に関する先行研究

長谷堂貝塚資料の具体的分析に入る前に、本貝塚が立地する三陸海岸域⁽¹⁾を中心とした東北地方太平洋沿岸域における縄文貝塚出土の動物遺体に関する先行研究について触れておきたい。

東北地方縄文時代の動物遺体の研究は、太平洋側の貝塚を対象に推し進められてきた。当該地域における研究の萌芽は、若林勝邦による福島県相馬郡新地村小川貝塚の紹介にみることができ(若林1890)。後に館岡虎三によって詳細な紹介がなされている(館岡1895)。他にも、八木装三郎によって岩手県門前貝塚や瀬沢貝塚の踏査がなされている(八木1899)。

上記の報告は種名記載に留まるものであったが、次第に出土動物遺体の定量的分析が実施されるようになっていく。林謙作は、宮城県浅部貝塚の調査において出土したニホンジカ・イノシシ

遺体の定量的分析をもとに、遺跡利用の在り方について考察している。種や部位の組成においてニホンジカ・イノシシの比率やそれぞれの上顎骨の出土量に差異がみられたことから、そこには利用価値の差が反映されていると指摘した（林 1970）。また、種組成ではニホンジカ・イノシシの出土量が多いことから、この遺跡における主要な生業が狩猟活動であったということを明らかにしている。さらに、動物遺体の出土地点や層位の検討から、当時の生業活動において作業場の位置が季節的に変化していた可能性を指摘した（林 1971）。このような分析が展開されるようになったなかで、篩を用いた資料採取法が実施され、より詳細な検討もおこなわれるようになる。代表的な事例としては、中沢目貝塚（東北大学文学部考古学研究会 1984、1985）や宮城県田柄貝塚（宮城県教育委員会 1986）、里浜貝塚（東北歴史資料館 1986、1987）などがあげられる。これらは1 mm メッシュの篩を用いて詳細に調査され、貝層の詳細な変化や貝殻成長線分析による季節性の推定などがなされた。

また、定量的分析をふまえた複数遺跡の比較検討が実施され、地域性の把握が試みられた。酒詰仲男によって出土動物遺体の全国的な集成がおこなわれ（酒詰 1961）、よりマクロ的視点で列島における狩猟や漁撈対象物の地域性が論じられるようになる。金子浩昌は、三陸海岸についてはマグロ、カツオ等の出土量が多い点をふまえ、漁撈活動の活発性を指摘した。仙台湾に関しては、北上川河口に面する外海性貝塚や仙台北野北部に位置する湖沼域に属する主淡性貝塚など、多様な性格の貝塚が存在している点を指摘した（金子 1965）。後藤勝彦は、仙台湾沿岸域の貝塚群を北上川中流域、北上川下流域、三陸沿岸、松島湾沿岸の4つに分類し、各地域で狩猟・漁撈対象物が異なる点を指摘した（後藤 1985）。

このような分析の蓄積を経て、以降は多角的な視点から検討が推し進められている。長谷川豊は宮城県田柄貝塚を対象に、石鏃とニホンジカ・イノシシの量的推移について検討し、当該集落の狩猟方法の復元を試みている。特に、石鏃とニホンジカ・イノシシの出土量がおおむね相関しながら推移する点を明らかにするとともに、双方が後期後葉から末葉にかけて増加し、晩期においても高い割合が維持されるという点を指摘した。そして、この点からニホンジカ・イノシシには石鏃を用いた弓矢猟が用いられていたとした（長谷川 2013）。

このような石器との関連性を論じた研究のほかにも、内陸部と沿岸部との差異に着目した検討もみられる。山田凜太郎は宮城県里浜貝塚出土の動物遺体に関して、これまで晩期を対象とした分析が主であった点をふまえ、後期における様相が不明である点を指摘した。そして、本貝塚の台圃風越地点出土の後期後葉に属する動物遺体の検討を通して、晩期中葉の動物遺体との比較を試みている。その結果、後期から晩期にかけ、貝類では岩礁性貝類が減少する点、魚類に関してはマイワシの出土量が増加する点、鳥類についてはウ科の出土量が急増する点などを明らかにした。また、その背景について、貝類に関しては海での砂泥化に伴う環境変化、魚類に関しては内陸との交易、鳥類については骨角器素材としての需要増大があったと推定した（山田 2017）。さ

らには、この後期と晩期の時期差を意識しつつ、内陸部との関係性に焦点を当て、内陸部と沿岸部における遺跡数の変化や海産魚類（マイワシ）の出土状況、ニホンジカ部位組成の比較といった多角的な分析を実施している。そして、内陸部の遺跡数増加に伴う魚類資源の需要増大に伴い海岸部から内陸部へとマイワシが供給され、それに対して骨角器素材としてニホンジカが内陸部から海岸部へと供給されるという交易モデルを提示した（山田 2018、2019、2021）。

松崎哲也は、新たに地理学的成果に目を向けながら三陸以南の各地域における貝類組成の変遷を比較した。その結果、各地域で海進・海退の速度が異なっていたことを明らかにし、加えて貝類組成は基本的に海水準変動と対応するものの、地形や沖積作用に大きく影響される点を明らかにした（松崎 2016）。また、縄文時代前・中期の三陸地方南部を対象に動物遺体組成を算出し、貝類・魚類が多量に出土する点から、当該地域では活発な漁撈活動が展開されていた点を明らかにした。脊椎動物遺体のなかで主体となる魚類の組成を算出し、マグロ属やカツオといった大型の回遊魚の割合が高い点を明らかにした。そして、その生態学的知見をふまえ、当該地域の生業活動は大型回遊魚の来遊季節（初夏～秋）に合わせて沿岸部に移動し漁撈活動を展開し、それ以外の季節では別の集落で生活をおこなっていたと考えた。中期後半には大型回遊魚の比率低下およびニホンジカ・イノシシの出土量増加が確認され、当該時期が生業形態の転換期であったと考えた（松崎 2017）。

このように、近年では当該地域周辺域における縄文時代の動物資源利用の検討が蓄積されつつある。また、ほかには前期から晩期に至るまで通時的な視点による検討も展開されている（須原 2024、松崎・山田 2023、山崎・他 2022）

上記のように、三陸沿岸域は縄文貝塚の密集地の1つであり、出土した動物遺体に関する多角的な分析が実施されてきた。ここに報告する長谷堂貝塚出土資料は、帰属時期が不明確な資料が多いという制約はあるものの、当該地域における動物資源利用の一端を示す資料として貴重なものである。

3. 分析方法

同定は基本的に現生標本との比較によりおこなった。巻貝類は殻頂部および殻口部により、二枚貝類は殻頂部により同定をおこなった。魚類・哺乳類については部位が同定可能な全標本を対象とした。哺乳類の四肢骨は骨端、およびその付近を残す標本はすべて対象とし、骨幹部破片については全周するもののみ対象とした。いずれも計数点を定め、集計の際に重複することのないよう留意した。

計測は貝類では殻長、殻高を対象とした。いずれも方眼紙上に置き、1 mm 単位で計測した。哺乳類は Von den Driesch (1976) にしたがって、計測可能な部位について適宜計測し、一覧表に記載した。哺乳類の計測にはいずれもデジタルノギスを用い、0.1mm 単位で計測した。

その他、同定の際には、哺乳類の四肢骨骨幹部の癒合状況や、解体痕や食肉目などによる咬痕、被熱等についても観察し、一覧表に記載した。ニホンジカ、イノシシについては下顎歯の咬痕状況を記録した。ニホンジカは大泰司（1980）、イノシシは小池・林（1984）、および Grant（1982）にしたがった。

4. 分析結果

同定された分類群一覧を表1に示した。同定結果の一覧は、貝類は表2、魚類は表3、哺乳類は表4に示した。

貝類は計27点同定され、アサリが11点と最多であった。その他にもマガキやオキシジミなど主に海水性貝類で構成されているが、汽水性のヤマトシジミも1点同定された。もっとも資料数が多いアサリ計測値の平均は、殻高が28.0mm、殻長が36.1mmであった。

表1 出土動物遺体種名一覧

腹足綱		GASTROPODA	
	ウミニナ		<i>Batillaria multiformis</i>
	アカニシ		<i>Rapana venosa</i>
二枚貝綱		BIVALVIA	
	イタヤガイ		<i>Pecten albicans</i>
	マガキ		<i>Crassostrea gigas</i>
	イタボガキ		<i>Ostrea denselamellosa</i>
	イソシジミ		<i>Nuttallia japonica</i>
	マテガイ		<i>Solen strictus</i>
	ヤマトシジミ		<i>Cobacula japonica</i>
	アサリ		<i>Ruditapes philippinarum</i>
	ウチムラサキ		<i>Saxidomus purpurata</i>
	オキシジミ		<i>Cyclina sinensis</i>
硬骨魚綱		OSTEICHTHYES	
	マグロ属		<i>Thunnus</i> sp.
哺乳綱		MAMMALIA	
	イヌ		<i>Canis familiaris</i>
	イノシシ		<i>Sus scrofa</i>
	ニホンジカ		<i>Cervus nippon</i>
学名・配列については、以下の文献を参照した。			
海産貝類：奥谷喬司(編) 2000『日本近海産貝類図鑑』東海大学出版会			
淡水産貝類：奥谷喬司(編) 1986『決定版 生物大図鑑 貝類』世界文化社			
魚類：中坊徹次(編) 2013『日本産魚類検索 全種の同定 第三版』東海大学出版会			
哺乳類：阿部永 2000『日本産哺乳類頭骨図説』北海道大学出版会			

長谷堂貝塚1955年度調査出土の動物遺体

表2 貝類同定結果一覧

北/南	グリッド	層位	ラベル備考	種	左右	数	残存状況	被熱・焼	備考
—	—	—	—	ウミニナ	—	1			
—	—	—	—	アカニシ	—	1			
—	—	—	—	イタヤガイ	右	1			
—	—	—	—	マガキ	左	1			
—	36	—	—	イタボガキ	右	1			
—	—	—	—	イソシジミ	右	1			殻高:29.7 殻長:40.4
—	—	—	—	マテガイ	右	1			
—	43	—	—	ヤマトシジミ	右	1			
—	—	—	—	アサリ	左	5			①殻高:25.4 殻長:35.4 ②殻高:23.7 殻長:30.4 ③殻高:29.5 殻長:—
北	C2	表土	—	アサリ	右	1			殻高:20.8 殻長:25.0
—	—	—	—	アサリ	右	1			殻高:40.3 殻長:53.3
—	—	—	—	アサリ	右	4			
南	A2	混貝下	—	ウチムラサキ	左	1			殻高:78.6 殻長:99.6
—	—	—	—	オキシジミ	左	1			殻高:53.5 殻長:48.4
南	5	貝層	—	オキシジミ	右	1			殻高:50.7 殻長:48.0

表3 魚類同定結果一覧

北/南	グリッド	層位	ラベル備考	種	部位	左右	数	備考
南	1	貝上?	—	マグロ属	尾椎	—	1	破片
—	ラベル混	—	—	マグロ属	腹椎	—	1	前面横径:41.0

表 4 哺乳類同定結果一覧

北/南	グリッド	層位	ラベル備考	種	部位	位置	癒合(近)	癒合(左)	左右	数	残存状況	備考
—	3	—	—	イヌ	軸椎	ade	x	d	—	1		
南	A6-包	—	—	イヌ	橈骨	abc	c	x	右	1		Bp:14.8
—	43	—	—	イヌ	脛骨	c	x	x	左	1		咬痕 (Furrowing)
—	ラベル混	—	—	イノシシ	頭蓋骨	後頭骨	—	—	—	1		蝶形骨
—	ラベル混	—	—	イノシシ	頭蓋骨	側頭骨	—	—	左	1		眼窩
—	ラベル混	—	—	イノシシ	頭蓋骨	側頭骨	—	—	左	1		結節
—	ラベル混	—	—	イノシシ	頭蓋骨	側頭骨	—	—	右	1		頬骨
—	38	—	—	イノシシ	下顎骨	[Px]	—	—	?	1	P2部分	焼
—	ラベル混	—	—	イノシシ	下顎骨	[PxM1<M2>(M3)]	—	—	右	1		M1=c、II
—	—	—	—	イノシシ	下顎骨	角	—	—	左	1		焼
—	38	—	—	イノシシ	下顎骨	角	—	—	右	1		
北	A1	貝	—	イノシシ	下歯	(I1)	—	—	左	1		
—	38	—	—	イノシシ	下歯	(M3)	—	—	左	1		
—	38	—	—	イノシシ	下歯	I1	—	—	右	1		
南	B2	混貝上	—	イノシシ	下歯	I2	—	—	右	1		
—	—	—	—	イノシシ	下歯	I2	—	—	右	1		
—	38	—	—	イノシシ	下歯	M1	—	—	—	1		M1=c、II
—	—	—	—	イノシシ	頸椎	b	x	x	—	1		
—	ラベル混	—	—	イノシシ	腰椎	abcde	c	c	—	1		
—	57	—	—	イノシシ	腰椎	abcde	c	c	—	1		カットマーク(椎体下)
—	A4区/4区	純貝/純貝中	3日/2日	イノシシ	肩甲骨	c	x	x	左	1		
—	60	—	—	イノシシ	肩甲骨	abc	c	—	左	1		GLP:44.5 BG:31.7 LG:31.1 SLC:34.4 カットマーク(後・内)
—	16	—	—	イノシシ	肩甲骨	fr	x	x	?	1		
—	—	—	—	イノシシ	肩甲骨	fr	x	x	?	1		
—	38	—	—	イノシシ	肩甲骨	fr	x	x	右	1		
—	43	—	—	イノシシ	上腕骨	de	x	c	左	1		Bd:51.1 BT:38.8 カットマーク(外)
—	—	—	—	イノシシ	橈骨	de	x	c	右	1		Bd:34.8
—	—	—	—	イノシシ	尺骨	bc	x	x	右	1		DPA:34.7 BPC:28.1±
—	51	—	—	イノシシ	尺骨	e	x	e	左	1		
—	13号	—	—	イノシシ	寛骨	寛骨臼	c	—	左	1		
—	—	—	—	イノシシ	膝蓋骨	abcde	—	—	左	1		
—	3	—	—	イノシシ	脛骨	c	x	x	右	1		
—	ラベル混	—	—	イノシシ	脛骨	de	x	c	左	1		Bd:40.5
南	A6	包	—	イノシシ	脛骨	de	x	c	右	1		Bd:39.3
—	3	—	—	イノシシ	脛骨	de	x	c	右	1		Bd:32.6±
—	—	—	—	イノシシ	足根骨4	abcde	—	—	左	1		カットマーク
—	—	—	—	イノシシ	踵骨	abcde	—	c	右	1		咬痕 (Puncture?)
—	57	—	—	イノシシ	中手/中足骨2/5	de	x	c	?	1		
—	3	—	—	イノシシ	中手/中足骨3/4	cde	x	c	?	1		
—	—	—	—	イノシシ	中手/中足骨3/4	de	x	c	?	1		
—	38	—	—	イノシシ	中手/中足骨3/4	de	x	c	?	1		咬痕 (Puncture)
—	38	—	—	イノシシ	中節骨	abcde	c	c	?	1		
—	—	—	—	イノシシ	中節骨	abcde	c	c	?	1		
—	57 (紙箱には「13號」)	—	—	イノシシ	末節骨	abcde	c	—	?	1		
—	60	—	—	イノシシ	末節骨	abcde	c	—	?	1		
南	5	貝中	—	イノシシ	後頭骨	頸動脈突起	—	—	右	1		
—	3	貝層中-30cm	2日	ニホンジカ	角	fr	—	—	?	1		
—	38	—	—	ニホンジカ	角	fr	—	—	?	1		
北	C	焼土中	—	ニホンジカ	角	fr	—	—	?	1		焼
—	38	—	—	ニホンジカ	角	fr	—	—	?	1		焼
—	43	—	—	ニホンジカ	頭蓋骨	側頭骨	—	—	左	1		頬骨
—	36	—	—	ニホンジカ	頭蓋骨	頭頂骨・側頭骨・後頭骨	—	—	右	1		焼
—	38	—	—	ニホンジカ	頭蓋骨	角・角座・角座骨	—	—	?	1		焼
—	38	—	—	ニホンジカ	上歯	M1/2	—	—	左	1		
南	—	—	—	ニホンジカ	上歯	M1/2	—	—	左	1		
北	A	貝層	—	ニホンジカ	下顎骨	関	—	—	左	1		焼
—	—	—	—	ニホンジカ	下顎骨	連	—	—	右	1		焼
—	51	—	—	ニホンジカ	下顎骨	筋関	—	—	左	1		
南	B5	黒土	—	ニホンジカ	下歯	M1	—	—	右	1		M1=5
南	B5	黒土	—	ニホンジカ	下歯	M2	—	—	右	1		M2=5
南	B5	黒土	—	ニホンジカ	下歯	M3	—	—	右	1		M3=5
—	3	—	—	ニホンジカ	頸椎	a	c	x	—	1		

長谷堂貝塚1955年度調査出土の動物遺体

—	38	—	—	ニホンジカ	頸椎	b	x	x	—	1	
—	43	—	—	ニホンジカ	頸椎	bcde	x	x	—	1	咬痕(Puncture・Pitting)
—	38	—	—	ニホンジカ	肩甲骨	a	c	—	右	1	
—	43	—	—	ニホンジカ	肩甲骨	ab	c	—	左	1	GLP:54.5 BG:39.8 LG:39.4 SLC:30.0 咬痕(Puncture)、カットマーク(前)
—	ラベル混	—	—	ニホンジカ	肩甲骨	abc	c	—	左	1	GLP:44.5 BG:29.5 LG:35.7 GLP:44.5 カットマーク(後)
南	A6	包	—	ニホンジカ	肩甲骨	abc	c	x	左	1	刺突痕? GLP:49.1 BG:35.3 LG:36.1 SLC:27.0
—	—	—	—	ニホンジカ	上腕骨	de	x	c	左	1	
—	38	—	—	ニホンジカ	橈骨	ab	c	x	左	1	Bp:39.8
—	ラベル混	—	—	ニホンジカ	橈骨	c	x	x	右	1	咬痕(Pitting)
—	A4	純貝中	—	ニホンジカ	橈骨	de	x	d	左	1	カットマーク(前)
—	A4	純貝中	—	ニホンジカ	橈骨	de	x	c	右	1	Bd:8.7
—	38	—	—	ニホンジカ	尺骨	ab	d	x	左	1	
—	38	—	—	ニホンジカ	尺骨	b	x	x	右	1	
—	—	—	—	ニホンジカ	手根骨3	abcde	—	—	右	1	
—	38	—	—	ニホンジカ	中手骨	c	x	x	? 1	前面	
—	13号	—	—	ニホンジカ	中手骨	de	x	c	? 0.5		
—	38	—	—	ニホンジカ	寛骨	寛骨白	c	x	右	1	
—	51	—	—	ニホンジカ	寛骨	腸骨・坐骨	x	—	左	1	
—	43	—	—	ニホンジカ	大腿骨	a	c	x	左	1	
—	43	—	—	ニホンジカ	大腿骨	ab	d	x	右	1	焼
—	ラベル混	—	—	ニホンジカ	脛骨	a	c	x	左	1	Bp:61.4
—	57	—	—	ニホンジカ	脛骨	de	x	c	右	1	Bd:38.7
—	ラベル混	—	—	ニホンジカ	踵骨	cd	—	x	右	1	
—	38	—	—	ニホンジカ	踵骨	cde	—	d	右	1	
—	38	—	—	ニホンジカ	距骨	abcd	—	—	右	1	被熱
北	A1	表土	—	ニホンジカ	距骨	abcde	—	—	左	1	
—	30	—	—	ニホンジカ	距骨	abcde	—	—	右	1	Bd:25.4 GL:42.8 GLm:38.8
—	—	—	—	ニホンジカ	中足骨	abc	c	x	左	1	前面
—	57	紙箱には「13號」	—	ニホンジカ	基節骨	abcde	c	c	? 1		
南	A6	包	—	ニホンジカ	中節骨	de	x	c	? 1		
—	—	—	—	ニホンジカ	橈骨・尺骨	cd	x	x	右	1	橈骨・尺骨癒合、被熱
—	—	—	—	ニホンジカ	果骨	abcde	c	c	右	1	
—	1	—	—	ニホンジカ/ イノシシ	胸椎	bcdef	x	x	—	1	
—	16	—	—	ニホンジカ/ イノシシ	胸椎	f	x	x	—	1	
—	38	—	—	ニホンジカ/ イノシシ	腰椎	ac	d	d	—	1	
—	51	—	—	ニホンジカ/ イノシシ	肋骨	a	c	x	? 1		
—	A4	純貝中	—	ニホンジカ/ イノシシ	肋骨	a	c	x	? 1		
—	—	—	—	ニホンジカ/ イノシシ	肋骨	fr	x	x	? 6		
—	1	—	—	ニホンジカ/ イノシシ	肋骨	fr	x	x	? 1		
—	38	—	—	ニホンジカ/ イノシシ	肋骨	fr	x	x	? 1		
—	3	—	—	ニホンジカ/ イノシシ	肋骨	fr	x	x	? 2		
—	16	—	—	ニホンジカ/ イノシシ	肋骨	fr	x	x	? 1		
—	3	—	—	ニホンジカ/ イノシシ	椎骨	a	x	c	—	1	
—	13号	—	—	ニホンジカ/ イノシシ	大腿骨	a	e	x	? 1		
—	—	—	—	ニホンジカ/ イノシシ	大腿骨	a	e	x	? 1		
北	A	貝下	—	ニホンジカ/ イノシシ	大腿骨	e	x	c	? 1	焼	
—	—	—	—	ニホンジカ/ イノシシ	末節骨	e	x	—	? 1		
—	A4区/4区	純貝/純貝中	3日/2日	海獣類	下顎骨	—	—	—	左	1	

・位置 四肢骨=a:近位端, b:近位部, c:骨幹, d:遠位部, e:遠位端 椎骨=a:椎体, b:左前関節, c:右前関節, d:左後関節, e:右後関節, f:棘突起 下顎骨=筋:筋突起, 関:関節突起, 角:下顎角, 枝:下顎枝
 ・四肢骨骨端癒合 完了:c, 未癒合=骨幹と骨端:+, 骨幹:d, 骨端:e, 骨端線残:線・咬耗指数 ニホンジカ:数字(大森司 1980) イノシシ:アルファベット(Grant 1982), 数字(小池・林 1984)

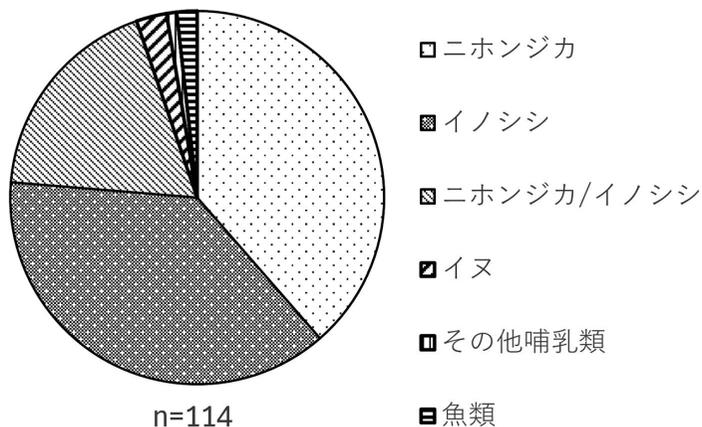


図1 長谷堂貝塚脊椎動物遺体組成

魚類は2点のみで、マグロ属の腹椎と尾椎がそれぞれ1点ずつ同定された。

哺乳類は計116点同定された。ニホンジカとイノシシを主体とする。両種とも解体痕が確認された。ニホンジカでは頭骨や肩甲骨、イノシシでは腰椎や肩甲骨、上腕骨、足根骨にみられた。両種とも前肢が中心となる。

以上のように本資料群はニホンジカやイノシシといった大型陸棲哺乳類が主体であった。ただし、目視による採取資料であるため、小型資料は見落とされている可能性が高い。

表5 骨角製品一覧

図番号	北／南	グリッド	層位	ラベル備考	器種	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	素材	備考
2-1	南	A1	混貝下部-80	—	骨鏃	29.9	6.4	5.9	?	
2-2	—	—	—	—	骨鏃	[34.4]	[7.4]	[7.2]	?	被熱
2-3	—	4	純貝28cm	2日	ヤス状刺突具	[98.9]	[18.3]	[5.5]	?	
2-4	—	4	混貝-20	—	錐	[56.7]	[12.4]	[4.6]	イノシシ犬歯 (上下左右不明)	
2-5	—	—	混土中層	2日3日	骨針	[26.3]	[12.4]	[3.0]	?	
2-6	—	2	貝層	5日	骨針	[54.1]	[7.5]	[7.1]	?	
2-7	—	2	貝層	5日?	骨針?	[50.8]	[9.6]	[4.6]	イノシシ腓骨骨幹部(左右不明)	被熱
2-8	—	A3	貝層下	—	垂飾	[30.7]	[7.9]	[5.7]	イノシシ下歯 I2左	
2-9	南	A	表土	—	垂飾	[46.1]	[13.6]	[5.1]	イノシシ犬歯 (上下左右不明)	

表6 加工痕を残す資料一覧

図番号	北/南	グリッド	層位	ラベル備考	種	部位	位置	数	備考
2-10	—	5	混貝下	2日	ニホンジカ	角	fr	1	擦痕、擦切
2-11	—	2	貝層	—	ニホンジカ	角	fr	1	擦痕
2-12	—	3	混貝下3B/38	—	不明鳥類	四肢骨	c	1	擦切痕
2-13	—	B-3	混貝中-25cm	4日	?	?	?	1	擦痕、擦切

5. 骨角製品・加工痕を残す資料

実測図を図2に、観察結果は骨角製品を表5、加工痕を残す資料を表6に示した。

骨角製品は9点確認された(図2-1~9)。骨鏃(図2-1・2)が2点みられたが、素材は不明である。ヤス状刺突具(図2-3)は1点で、やはり素材は不明である。錐(図2-4)は1点あり、イノシシ犬歯を素材としている。骨針(図2-5・6)は2点みられたが、素材は不明である。骨針?とした資料(図2-7)も1点あり、イノシシ腓骨を素材とする。垂飾(図2-8・9)は2点確認された。イノシシ犬歯および下顎第2切歯を素材とする。

加工痕を有する資料は4点確認でき、ニホンジカ角が2点、不明鳥類の四肢骨が1点、素材不明が1点である(図2-10~13)。骨角製品のうち、素材が判明したものについてはイノシシの歯や腓骨を素材とする資料が多かった。しかしながら、素材不明の資料も多く、加工痕を有する資料ではニホンジカの角もみられたため、ニホンジカとイノシシの双方が素材として用いられていたことがわかる。

6. 三陸沿岸域における縄文貝塚出土動物遺体の組成比較

6-1. 比較検討に関する資料と方法

以上のように、1955年に実施された長谷堂貝塚発掘調査出土の動物遺体の様相が明らかとなった。本貝塚では、その後多数の発掘調査が実施されており、多量の動物遺体が得られている。以下では、本資料を視野に入れつつも、他調査で得られた本貝塚出土資料と、周辺遺跡から出土した動物遺体の組成比較をおこない、三陸沿岸域における縄文時代の動物資源利用について、若干の考察を試みる。

比較対象とした遺跡⁽²⁾は、長谷堂貝塚のほか、岩手県清水貝塚、大陽台貝塚、大洞貝塚、宮城県田柄貝塚である。各遺跡について、その分布を図3に示した。各遺跡・資料の概要について、表7に示した。分析方法としては、各遺跡の貝類組成、魚類組成、鳥獣類組成を同定標本数(NISP: Number of Identified Specimen)によって算出し、比較した。

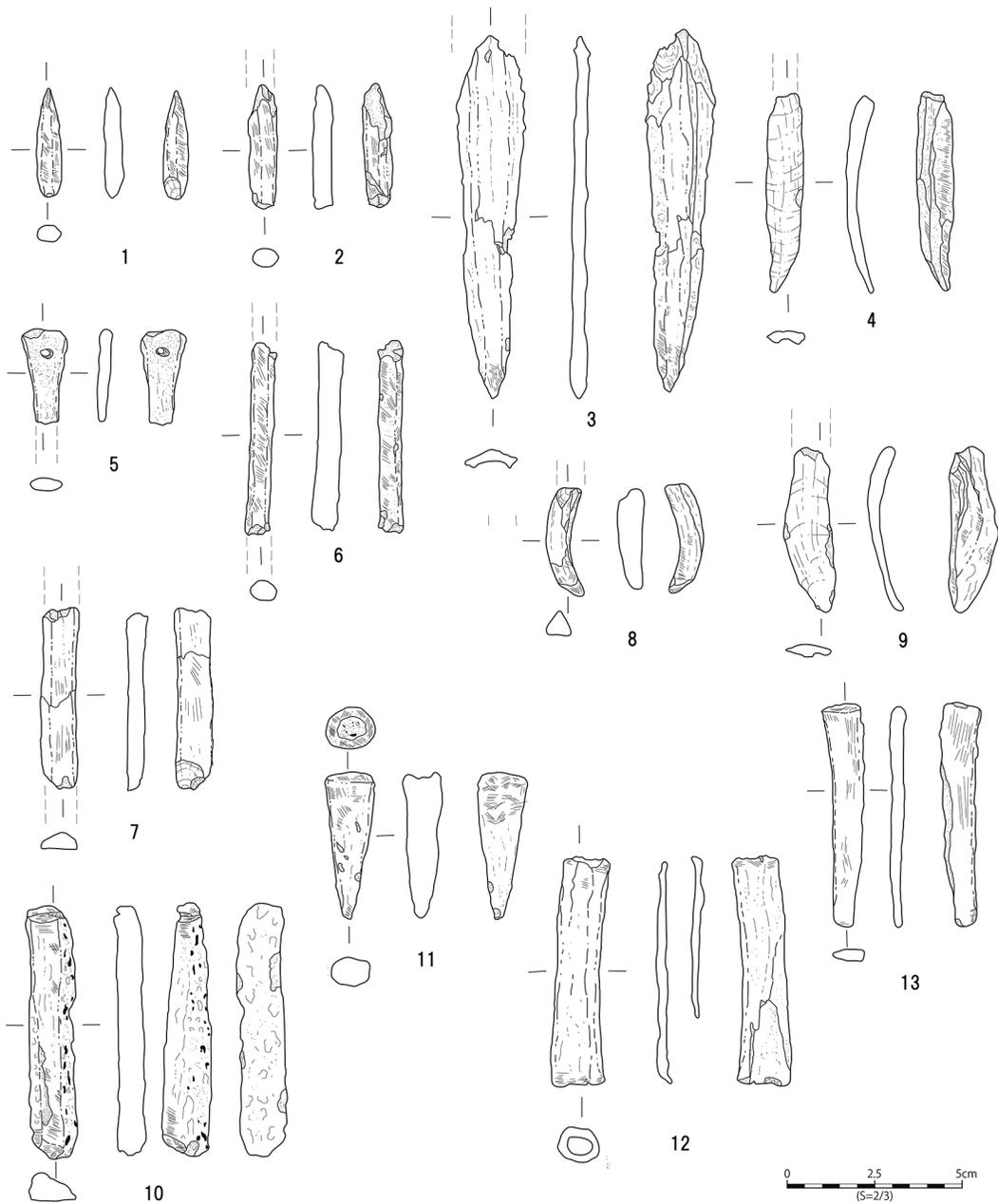


図2 骨角製品・加工痕を残す資料実測図

長谷堂貝塚1955年度調査出土の動物遺体



図3 比較遺跡の位置

表7 比較遺跡・資料の概要

県	市町村	遺跡名	帰属時期	資料篩別	引用文献
岩手県	大船渡市	清水貝塚	前期前葉～後葉	10	岩手県教育委員会 (1976)
		長谷堂貝塚	中期中葉～末葉	5・3・1	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター (2001・2004・2020)
		大洞貝塚	晚期中葉～後葉	4・2・1	大船渡市教育委員会 (1997・2000・2004)、氷見 (2007)
	陸前高田市	大陽台貝塚	前期後葉～中期中葉	?	陸前高田市教育委員会 (1979)
宮城県	気仙沼市	田柄貝塚	後期前葉～晚期中葉	10・5・1	宮城県教育委員会 (1986)

6-2. 比較結果

① 貝類組成 (図4)

貝類組成について比較した結果、前期前葉～後葉の清水貝塚ではアサリとスガイが約45%ずつ占め、主体であった。これに対し、長谷堂貝塚は基本的にアサリで構成されていた。後・晩期の

大洞貝塚、田柄貝塚についてみていくと、長谷堂貝塚と同様に基本的にアサリが主体であるという結果が得られた。ただし、田柄貝塚（後期末葉）ではハマグリが約35%を占め、比較的割合が高かった。

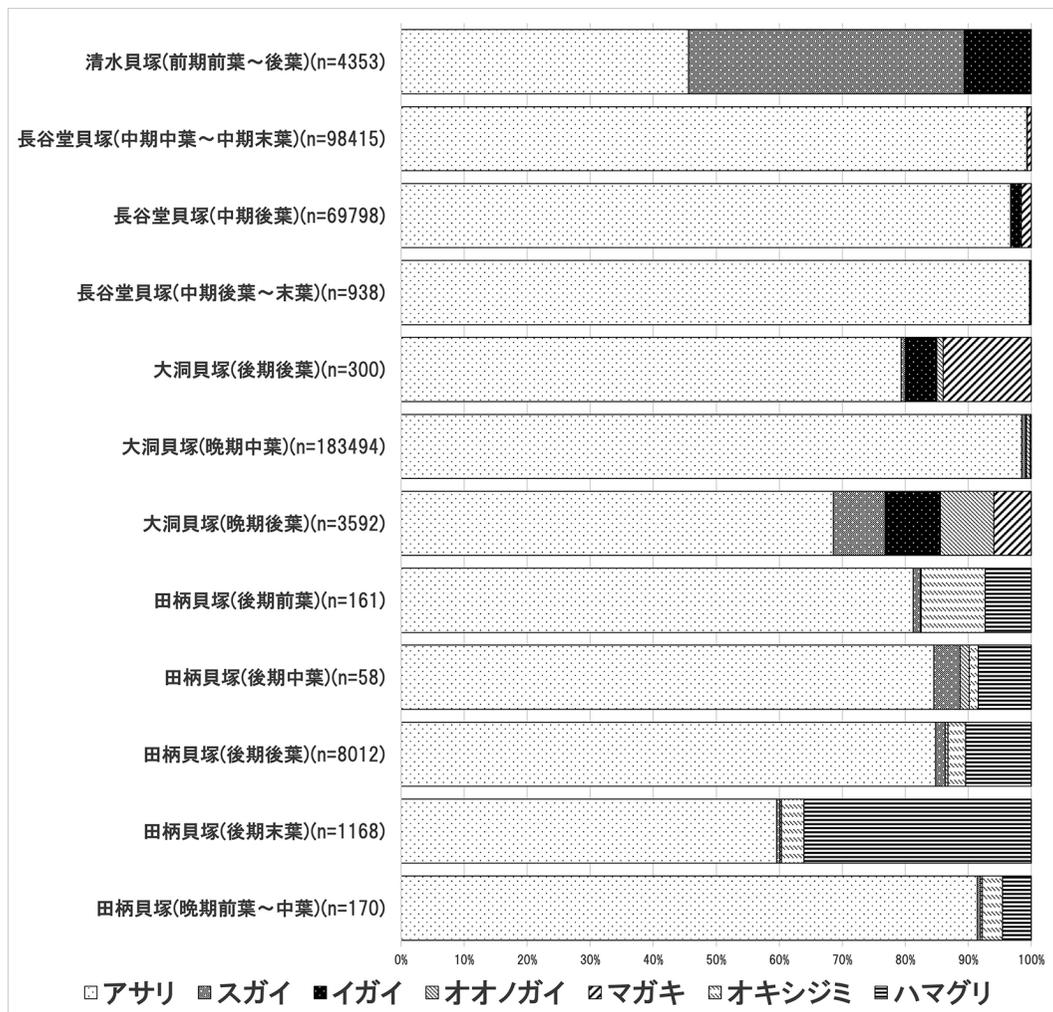


図4 貝類組成比較

② 魚類組成 (図5)

前期前葉～後葉の清水貝塚では次第にマグロ属が主体であり、次いでタイ科の比率が高かった。これに対して、長谷堂貝塚では中期中葉から後葉においてニシン科が主体であった(約65%)。中期後葉ではサケ科も主体的であり、約40%を占めていた。これに次いで、サバ属が約10%含まれていた。大洞貝塚(後期後葉)ではカサゴ亜目が約75%占めているが、晩期では少ない。晩期

長谷堂貝塚1955年度調査出土の動物遺体

中葉および後葉ではサケ科が多く、他にはアイナメ属やサバ属、カレイ科なども確認できる。後期前葉から晩期中葉に至るまで田柄貝塚ではニシン科が主体であり、次いで多いのがサバ属であった。

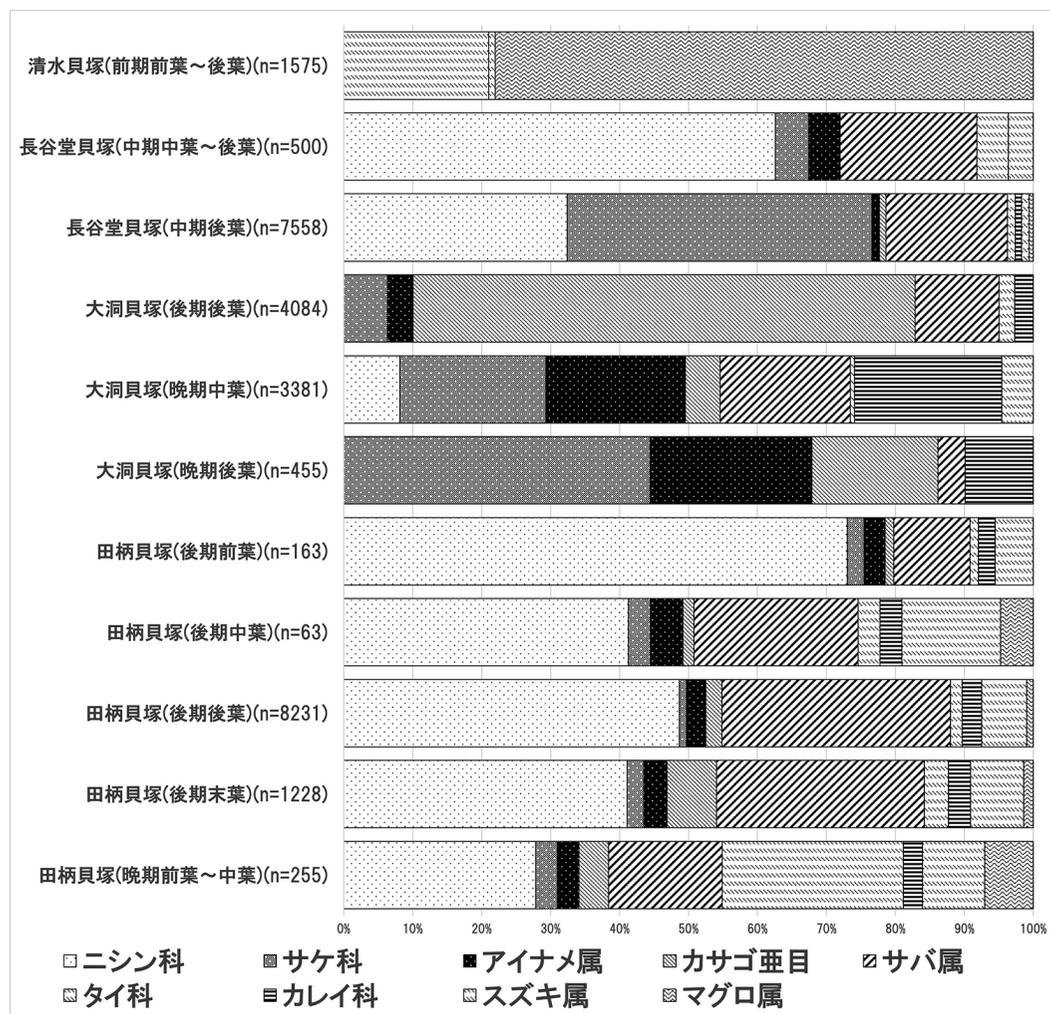


図5 魚類組成比較

③ 鳥獣類組成 (図6)

まず、鳥獣類組成のうち、ニホンジカとイノシシといった大型哺乳類の比率についてみていく。前期の清水貝塚から中期の長谷堂貝塚をみると、次第に両種の占める割合が増加していく傾向が確認された。大陽台貝塚および長谷堂貝塚(中期中葉～末葉)では約90%を占めていた。ただし、長谷堂貝塚の中期後葉資料では全体の60%に留まる。後期から晩期に関して、大洞貝塚では約80

～90%と高い割合を占めているが、田柄貝塚では約50～70%と比較的低かった。ニホンジカとイノシシを比較すると、両種がほぼ同率であるのは清水貝塚、田柄貝塚（後期前葉）である。ニホンジカが高率となるのが大陽台貝塚、長谷堂貝塚、大洞貝塚であった。イノシシが優勢となるのは田柄貝塚の後期中葉～末葉資料である。小型獣に関しては、長谷堂貝塚（中期後葉）および田柄貝塚（後期前葉）でやや高率であり、約30%を占めていた。鳥類は基本的に出土量が少ないものの、前期の清水貝塚においては約30%を占めていた。田柄貝塚では時期が下るとともに割合がやや増加していき、約20～25%を占めていた。

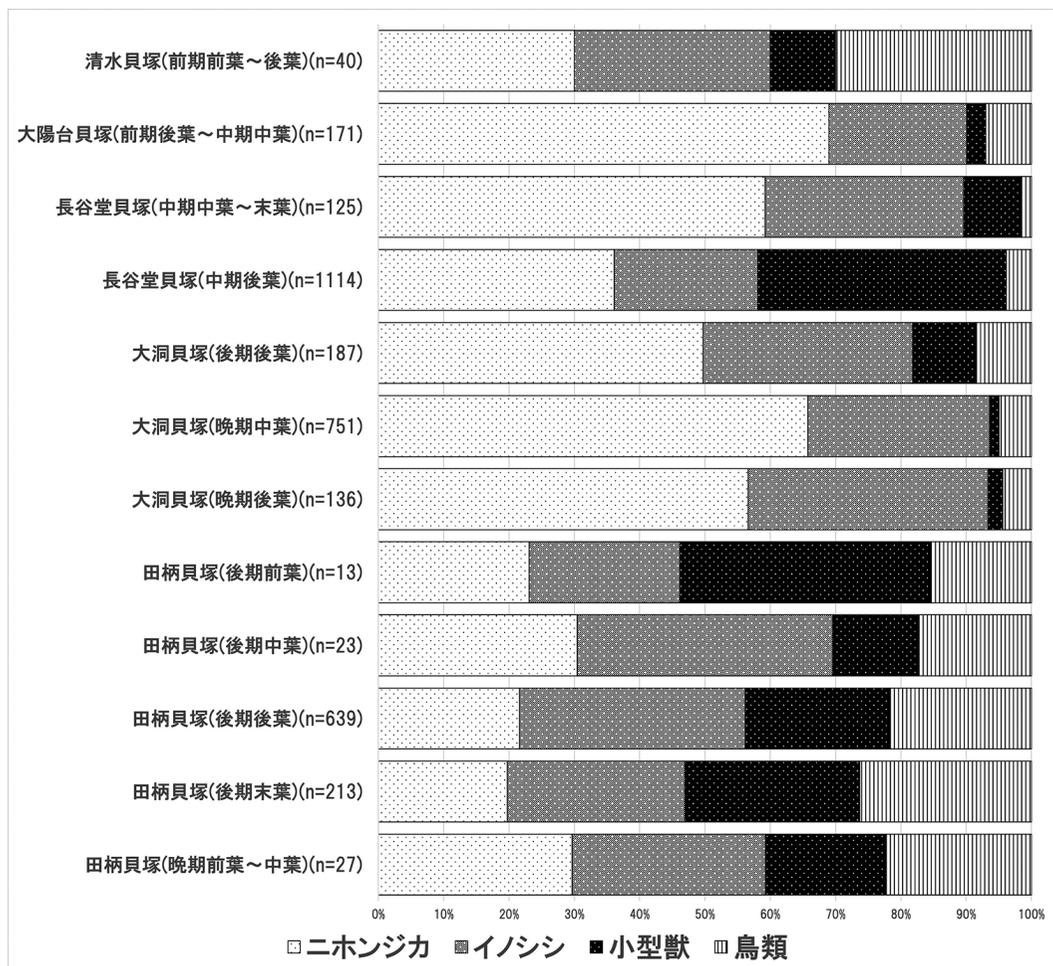


図6 鳥獣類組成比較

6-3. 考察

上記の比較結果をふまえて、以下では三陸海岸域における縄文時代の動物資源利用について考

察を試みる。また、その際には生態学的観点参照する⁽³⁾。

① 採貝活動

貝類組成では、前期から中期にかけて海水性種が主体であった。しかし、前期の清水貝塚ではアサリとともにスガイが一定量占めているのに対し、中期の長谷堂貝塚ではアサリが主体であった。後・晩期においても、海水性種（アサリ）で構成されるという傾向が確認された。なお、後期末葉の田柄貝塚では比較的ハマグリ比率が高く、全体の約35%を占めていた。

以上の点より、貝類組成については種が異なる部分はわずかにあるものの、アサリをはじめとする海水性種で構成されるという通時的な傾向が確認できる。

三陸海岸域における貝類が基本的に海水性種で構成され、海退に伴う汽水化の影響が認められない点については、松崎哲也が指摘しているように（松崎 2016）、当該地域がリアス式海岸という沈降地形であり、海進後、海退の影響をあまり受けなかったことによる可能性が想定できよう。

② 漁撈活動

前期・中期に関しては、清水貝塚のように外洋性のマグロ属が主体となる遺跡と、長谷堂貝塚のように通し回遊性のサケ科や表層回遊性のニシン科およびサバ属で構成される遺跡の二者がみられた。特に、リアス式海岸という地理的特徴から外洋性漁撈の存在は容易に想定されるが、長谷堂貝塚においては淡水域の通し回遊性であるサケ科、内湾の沿岸性表層回遊魚であるニシン科やサバ属が看取されたことから、多様な漁撈域が想定される。この点に関して、長谷堂貝塚の土地利用においては河川の流路変更などがあった可能性が指摘されており、豊富な水資源がその背景にあり、本貝塚の占地傾向の一つの要因であったと指摘されている（鈴木 2009）。長谷堂貝塚における多様な水産資源利用形態の背景には、このような土地利用が影響している可能性がある。

後期・晩期に関して、まず大洞貝塚では後期後葉において湾内定住のカサゴ亜目が主体であるが、晩期ではサケ科の割合が増加するという変化が捉えられた。しかし、依然としてアイナメ属やカレイ科などの内湾性種も確認できることから、従来の内湾域における漁撈を基盤としつつ、次第に淡水域での漁撈活動も展開されるようになったと推定される。サケ科の増加に関しては、これらが保存食料として消費された可能性（氷見 2007）や、集中的な消費の可能性（大船渡市教育委員会 1997）などが指摘されており、その背景については何らかの文化的要因が関わっている可能性が考えられる。田柄貝塚（後期前葉～晩期中葉）ではニシン科が主体であり、これに次ぐのがサバ属であった。この点から、本貝塚では内湾での沿岸性表層回遊魚を対象とした漁撈が盛んにおこなわれていた。大洞貝塚のように内湾性種や淡水性種がみられる遺跡と内湾性種主体となる田柄貝塚という遺跡間差異は、当時の漁撈活動が地域性の強いものであったことを示唆する。

また、前期・中期では外洋性種のなかでもマグロ属が主体となる遺跡が確認された。これに対

して、後期・晩期では基本的にマグロ属の出土例は少ないという結果が得られた。この背景については、マグロ属が沿岸至近に回遊しなくなった可能性が指摘されている（松崎 2017、山崎・他 2022）。このような点は、前・中期と後・晩期の時期的差異として指摘できる。なお、その間も貝類組成では基本的に海水性種で構成されていた。生態学的観点からみると、貝類組成と魚類組成で若干異なる部分が見受けられ、採貝と漁撈が異なる環境の領域で展開されていたことがうかがわれる。

③ 狩猟活動

鳥獣類組成について検討した結果、ニホンジカ・イノシシが主体となりながらも、前期の清水貝塚や後期の田柄貝塚のように鳥類の割合が一定量占めているパターンや、長谷堂貝塚（中期後葉）および田柄貝塚（後期前葉）のように小型獣の比率が約30%を占めるパターンなど、多様性が確認された。また、ニホンジカ・イノシシ比率に関しては清水貝塚や田柄貝塚（後期前葉）のように両種がほぼ同率であったパターン、大陽台貝塚、長谷堂貝塚、大洞貝塚のようにニホンジカが高率となるパターン、田柄貝塚（後期中葉～末葉）のようにイノシシが優勢となるパターンが確認された。狩猟活動の対象に関する地域性があったと考えられる。

7. おわりに

本稿では、1955年に実施された長谷堂貝塚発掘調査出土の動物遺体について報告した。また、三陸海岸域における長谷堂貝塚周辺の縄文時代遺跡から出土した動物遺体について組成比較をおこない、当該地域における動物資源利用の共通性および地域性がいくつか認められた。

長谷堂貝塚1955年資料に関して、種組成でみるとニホンジカおよびイノシシが主体であった。魚類に関してはマグロ属が確認され、貝類はアサリが主体であった。また、骨角製品や加工痕を有する資料も確認された。本資料は考察において取り上げた長谷堂貝塚の中期段階資料と概ね類似する傾向を示しているといえる。魚類に関しては、ニシン科やサケ科が主体的であった他報告と異なる傾向であるが、本資料では大型のマグロ属しか確認されていない点をふまれば、資料の篩別が実施されていないためにニシン科のような小型資料が回収されなかった、というサンプリング・エラーによるバイアスの影響が大きいと推定される。本資料に関しては所属時期を絞り込める資料が少なく、肉眼採取によるという制約はあるが、本貝塚における動物資源利用の一端を明らかにすることができたものと考えられる。

註

(1) 三陸地方は青森県南東部から宮城県牡鹿半島までの太平洋沿岸域における範囲を指し、岩手県宮古市を境に南北に分けることができる（松崎 2017）。本稿においては、南部を三陸海岸域として扱った。

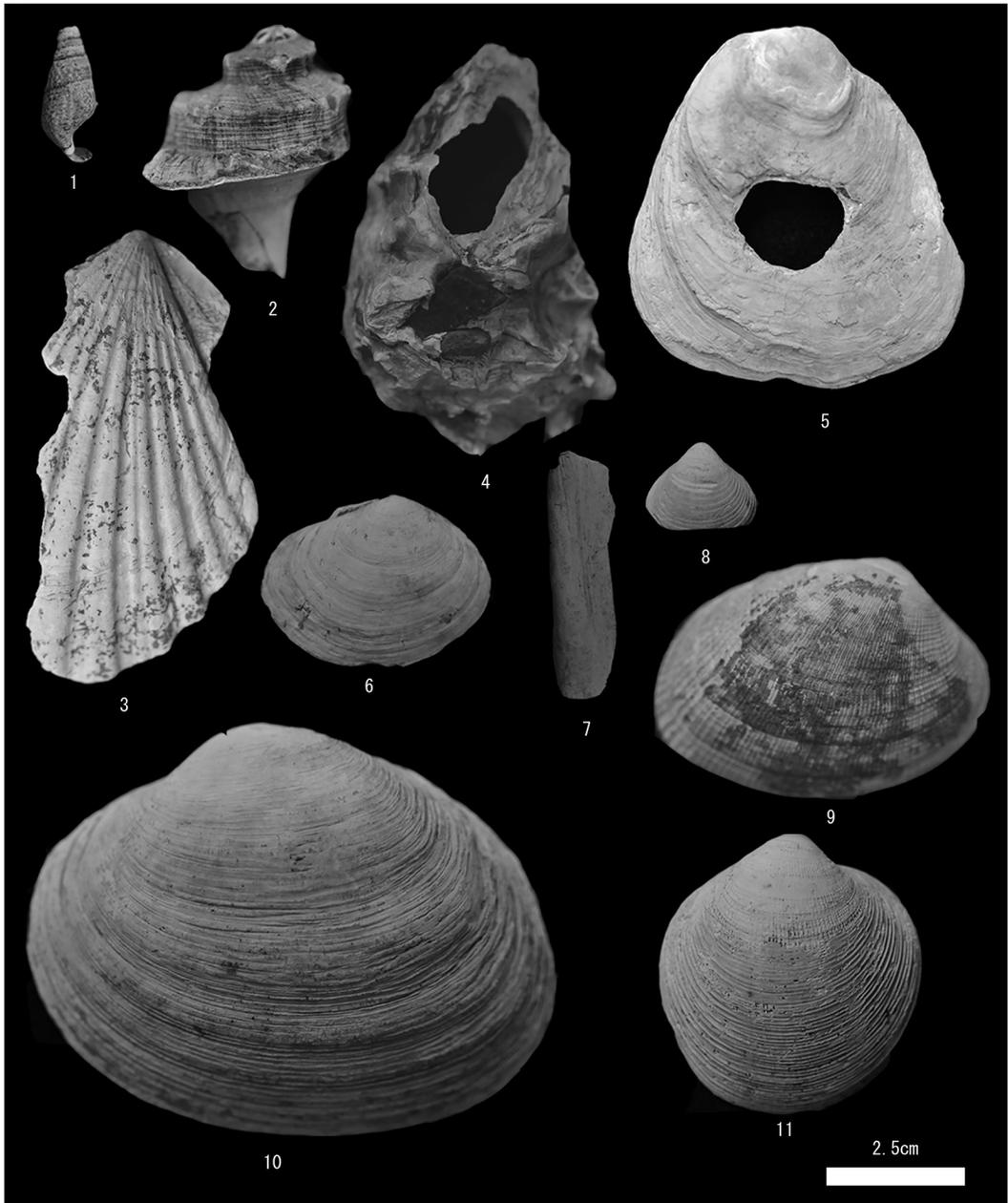
長谷堂貝塚1955年度調査出土の動物遺体

- (2) 比較対象遺跡・資料に関しては、小型資料についても議論の俎上に載せることを目的に、資料の篩別が実施されており、100点以上の動物遺体が得られている遺跡を取りあげた。
- (3) 貝類に関しては松島・前田（1985）、魚類に関しては山崎（2015）を参照した。

引用文献

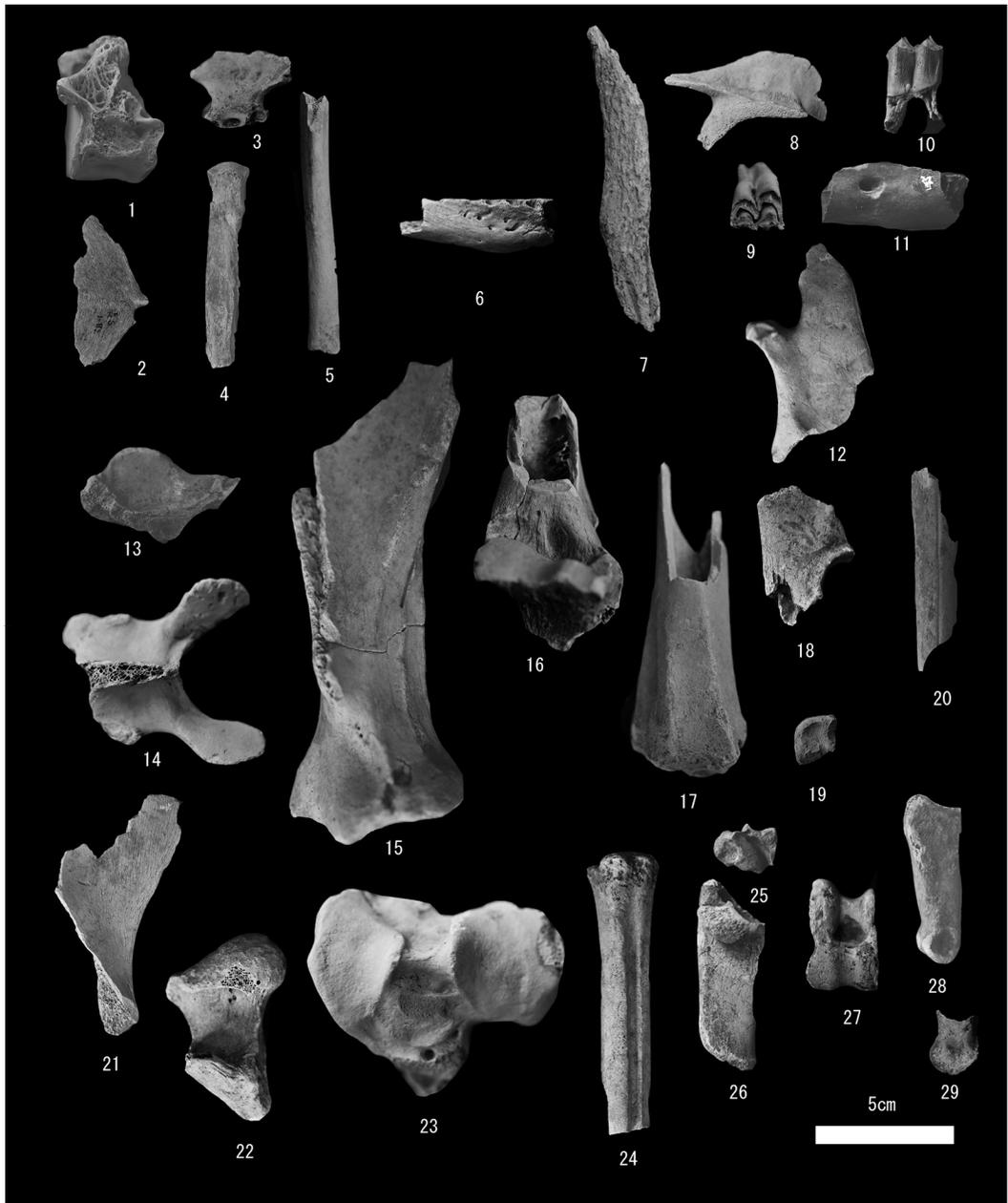
- Grant, A. 1982 The Use of Tooth Wear as a Guide to the Age of Domestic Ungulates. In: Wilson, B., Grigson, C., and Payne, S. (eds.) *Ageing and Sexing Animal Bones from Archaeological Sites*, BAR British Series 109. Oxford:Archaeopress. pp.91-108
- Von den Driesch, Angela. 1976 *A Guide to The Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites*. Peabody Museum Bulletins No.1. Cambridge, Mass.: Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University.
- 岩手県教育委員会 1976『大船渡市清水貝塚発掘調査概報』（岩手県23集）
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2001『長谷堂貝塚発掘調査報告書』（岩手県367集）
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004『長谷堂貝塚発掘調査報告書』（岩手県434集）
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2020『長谷堂貝塚発掘調査報告書』（岩手県719集）
- 大森司紀之 1980「遺跡出土ニホンジカの下顎骨による性別・年齢・死亡季節査定法」『考古学と自然科学』13. 日本文化財科学会. pp.51-74
- 大船渡市教育委員会 1997『岩手県大船渡市大洞貝塚平成6・7・8年度範囲確認調査概報』
- 大船渡市教育委員会 2000『岩手県大船渡市大洞貝塚範囲確認調査報告書』
- 大船渡市教育委員会 2004『岩手県大船渡市大洞貝塚平成13・14・15年度内容確認調査報告書』
- 金子浩昌 1965「貝塚と食料資源」『日本の考古学Ⅱ縄文時代』河出書房. pp.372-398
- 小池裕子・林良博 1984「遺跡出土ニホンイノシシの齢査定について」『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学—総括報告書—』文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班. pp.519-524
- 後藤勝彦 1985「仙台湾沿岸の貝塚と動物」『季刊考古学』11. 雄山閣 pp.23-30
- 酒詰仲男 1961『日本縄文石器時代食料総説』土曜会
- 鈴木めぐみ 2009「長谷堂貝塚の縄文時代における土地利用」『日々の考古学』2. 東海大学文学部考古学研究室. pp.79-94
- 須原拓 2024「縄文時代における大船渡湾周辺の高産資源利用について—貝塚資料からの検討—」『紀要』43. (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター. pp.27-44
- 館岡虎三 1895「磐城新地貝塚探究報告」『東京人類学雑誌』112. 東京人類学会. pp.400-410
- 東北大学文学部考古学研究会 1984『中沢目貝塚—縄文時代晩期貝塚の研究—』
- 東北大学文学部考古学研究会 1995『縄文時代晩期貝塚の研究2 中沢目貝塚Ⅱ』
- 東北歴史資料館 1985『里浜貝塚Ⅳ』（東北歴史資料館資料集13）
- 東北歴史資料館 1986『里浜貝塚Ⅴ』（東北歴史資料館資料集19）
- 西村正衛 1959「岩手県大船渡市長谷堂貝塚」『日本考古学年報』8. 日本考古学協会. pp.46-47
- 長谷川豊 2013「宮城県田柄貝塚における縄文時代のシカ類・イノシシ類—動物遺存体と石鐮の数量分析をもとに—」『古代文化』65-2. 公益財団法人古代学協会. pp.95-107
- 林謙作 1970「宮城県浅部貝塚出土のシカ・イノシシ遺体」『物質文化』15. 物質文化研究会. pp.1-11
- 林謙作 1971「宮城県浅部貝塚出土の動物遺体」『物質文化』17. 物質文化研究会. pp.7-21
- 水見淳哉 2007「岩手県大船渡市大洞貝塚における縄文時代後晩期の狩猟漁撈活動」『考古学談叢』東北大学大学院文学研究科考古学研究室須藤隆先生退任記念論文集刊行会. pp.431-445
- 松崎哲也 2016「東北地方における縄文時代前半期の貝類組成とその変遷」『動物考古学』33. 日本動物考古学会. pp.1-15

- 松崎哲也 2017「動物資源利用からみた三陸地方南部の縄文時代前・中期の生業形態」『宮城考古学』19. 宮城県考古学会. pp.57-72
- 松崎哲也・山田凜太郎 2023「東北地方太平洋沿岸域における縄文時代の動物資源利用」『日本考古学協会2023年度宮城大会「災害と境界の考古学」研究発表資料集』日本考古学協会2023年度宮城大会実行委員会. pp.111-120
- 松島義章・前田保夫 1985『先史時代の自然環境』東京美術
- 宮城県教育委員会 1986『田柄貝塚Ⅲ』（宮城県111集）
- 八木装三郎 1899「東北地方に於ける人類學的旅行」『人類學雜誌』15-163. 東京人類學會. pp.1-21
- 山崎健 2015「農耕開始期における漁撈活動の変化—伊勢湾奥部を事例として—」『日本考古学』39. 日本考古学協会. pp.17-30
- 山崎健・山田凜太郎・坂本匠・松崎哲也 2022「魚類遺存体からみた縄文海洋進出史（東北～東海地方）」『季刊考古学』161. 雄山閣. pp.49-52
- 山田凜太郎 2017「宮城県里浜貝塚における縄文時代後晩期の動物利用」『Bulletin of the Tohoku University Museum』16. Tohoku University Museum. pp.27-67
- 山田凜太郎 2018「縄文時代後晩期における遺跡の変遷—仙台湾北半を例として—」『宮城考古学』20. 宮城県考古学会. pp.151-163
- 山田凜太郎 2019「縄文時代後晩期の魚類利用とその時期差—仙台湾周辺から三陸沿岸を例として—」『動物考古学』36. 日本動物考古学会. pp.21-34
- 山田凜太郎 2021「縄文時代後晩期におけるニホンジカの利用とその時期差—仙台湾から三陸沿岸を中心に—」『考古学研究』67-4. 考古学研究会. pp.18-38
- 陸前高田市教育委員会 1979『太陽台貝塚』
- 若林勝邦 1894「磐城国宇多郡新地村貝塚発掘ノ話」『東京人類學會雜誌』6-57. 東京人類學會. pp.104-108
- 早稲田大学文学部考古学研究室 1999「岩手県大船渡市長谷堂貝塚の研究（Ⅰ）」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』44-4. 早稲田大学大学院文学研究科. pp.55-71
- 早稲田大学文学部考古学研究室 2000「岩手県大船渡市長谷堂貝塚の研究（Ⅱ）」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』45-4. 早稲田大学大学院文学研究科. pp.81-100



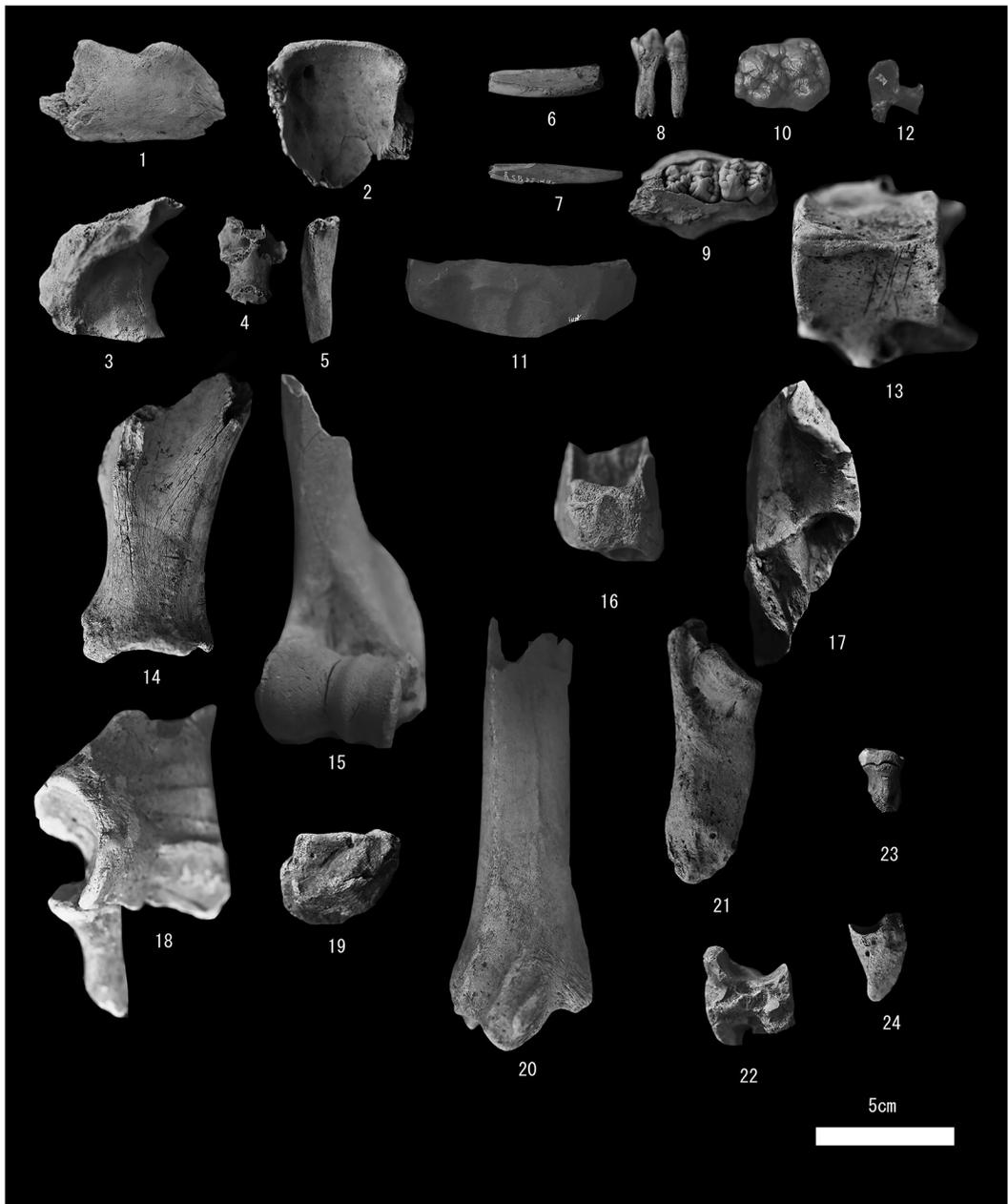
1. ウミニナ 2. アカニシ 3. イタヤガイ右 4. マガキ左 5. イタボガキ右 6. イソシジミ左 7. マテガイ右
8. ヤマトシジミ右 9. アサリ右 10. ウテムラサキ左 11. オキシジミ右

図版1 貝類



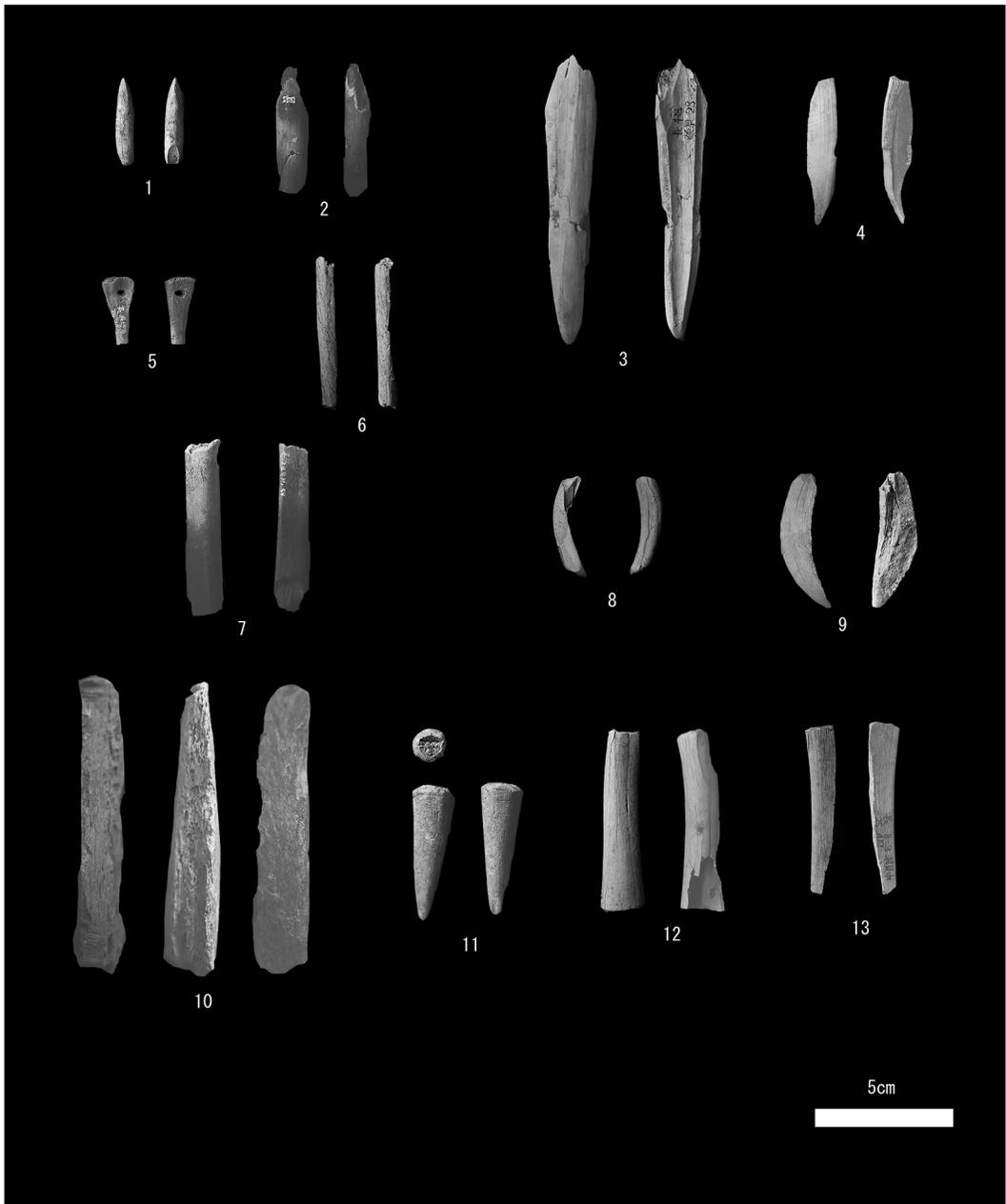
マグロ属 1. 腹椎 2. 尾椎 イヌ 3. 軸椎 4. 橈骨右 5. 脛骨左 海獣類 6. 下顎骨左
 ニホンジカ 7. 角 8. 頬骨左 9. 上歯M1/2 10. 下歯M1右 11. 下顎骨(連)(焼) 12. 下顎骨(筋関)
 13. 環椎 14. 頸椎 15. 肩甲骨(咬痕)左 16. 上腕骨左 17. 橈骨右 18. 尺骨左 19. 手根骨3右 20. 中足骨左右不明
 21. 寛骨左 22. 大腿骨左 23. 脛骨左 24. 中足骨左 25. 果骨右 26. 踵骨右 27. 距骨右 28. 基節骨 29. 中節骨

図版2 魚類・哺乳類①



イノシシ 1. 頬骨右 2. 前頭骨(眼窩)左 3. 側頭骨(結節)左 4. 蝶形骨 5. 後頭骨(頸動脈突起)右
 6. 下歯I1右 7. 下歯I2右 8. 下歯M1左 9. 下顎骨[PxM1<M2>(M3)]右 10. 下歯(M3)左 11. 下顎骨(角)(焼)左
 12. 頸椎 13. 腰椎(解体痕) 14. 肩甲骨左(解体痕) 15. 上腕骨左 16. 橈骨右 17. 尺骨右
 18. 寛骨左 19. 膝蓋骨左 20. 脛骨右 21. 踵骨右 22. 足根骨4左 23. 中節骨 24. 末節骨

図版3 哺乳類②



図版4 骨角製品・加工痕を残す資料